

細川ガラシャの行跡

中垣 秀夫 陸自69

細川ガラシャとして知られ、多くの戯曲や物語の主人公に採り上げられてきた「たま（玉／珠。時として「たま子」と称されることあり）」は永禄6年（1563）、明智光秀の三女として越前の国で生まれ、戦国時代から安土桃山時代を駆け抜け、39歳の若さで亡くなった女性である。

この間、天正6年（1578）、織田信長の周旋により、公家から武士になつて室町幕府や織田信長に仕えていた細川藤孝（幽斎）の嫡男・細川忠興に嫁いだ。

当時、信長は家臣同士の婚姻に統制を加えていたが、ともに室町幕府から迎え入れた家臣である明智光秀と細川藤孝を重用しており、両家の婚姻の仲立ち（主君の命令による婚姻「主命婚」）をしたことは、信長のみならず細川・明智両家にとつても政治的な思惑があつたと思われる。ちなみに、『細川家記』によれば、「信長は光秀の軍功を激賞するとと

もに、幽斎の文武武備を称え、忠興の武門の棟梁としての器を褒めたたえた内容で、それらの実績を信長が評価したうえで進めた政略結婚であつた」旨が記載されている。ところで、それらの事實は、天正6年8月11日に信長が明智光秀に出したとされる判物（古文書）に書かれているが、この古文書は文体が拙劣であり、書式も戦国期のものと異なつてるところから、偽作の可能性が指摘されてはいる。

婚姻後しばらくして細川忠興と「たま」の間に長女や長男が生まれ、その間、忠興の武勲が信長に認められて丹後12万石を与えられ宮津城に移るなど、平穩かつ幸せな日々が続いた。

そのような中であつて、天正10年（1582）6月、誰にも予想できなかつた「本能寺の変」が勃発した。「たま」の実父・明智光秀が主君の織田信長を討つたのである。しかし光秀の天下は続かず、山崎の戦いで備中から「中国大返し」で戻つて来た羽柴秀吉に討たれた。「たま」は「謀反人の娘」となり、忠興によつて三戸野（現在の京都府京丹後市弥栄町）に幽閉された。幽閉間「たま」

を支えたのは、結婚の際に実家から付けられた「小侍従」と細川家の親戚筋に当たる清原家の清原マリヤ（公家である清原枝賢の娘でキリシタン）らの侍女達であつた。当時は、離婚となれば妻は里方に帰されるのが普通であつたが、それをしなかつたのは、明智家が既に滅んでいゝという事情もあるが、本音は（私自身も邪推も含めて言わせて貰えば）忠興が「たま」を大好きで強く恋慕していたからと思われ。

忠興の「たま」への愛情が断ち切れなかつた証拠に、幽閉時代に「たま」は二人の男児を生んでいる。信長の没後に覇権を握つた秀吉の取り成しもあつて天正12年3月、忠興は「たま」を細川家の大坂屋敷に戻した。そして天正14年、後に熊本城主となる嫡男忠利（幼名・光千代）が生まれたが、病弱であつたため、「たま」の心労が募つた。しかも、忠利は幼くして徳川家に人質に出されて

いる。それまでは出家した舅・藤孝とともに禅宗を篤く信仰していた「たま」であつたが、忠興が高山右近から聞いたカトリックの話をする、その教えに心を魅かれていった。そして

翌年、夫の忠興が九州へ出陣すると、その留守を利用して密かに洗礼を受け、洗礼名ガラシャ（Gara-sha、ラテン語で「神の恵み」の意味）というキリシタンになつた。ところが、秀吉が九州で「バテレン追放令」を出したので、九州から帰国した忠興は棄教するように迫つた。しかし、「たま」は頑として訊かず、ついに忠興も黙認せざるを得なかつた。しかし怒りが収まらない忠興は「側室を5人持つ」と言い出すなど、「たま」につらく当たつた。「たま」は「夫と別れたい」と宣教師に告げたが、カトリックでは離婚を認めていないので、宣教師は「離婚の誘惑に負けてはならない。困難に立ち向かつてこそ、徳が磨かれる」と説き、思いとどまるよう説得した。

そのような中、慶長5年（1600）、忠興は徳川家康に付き従い上杉征伐に出陣した。忠興は平素から出陣に先立ち屋敷を守る家臣達に「もし自分の不在の折、妻の名譽に危険が生じたならば、日本の習慣に従つて、まず妻を殺し、全員切腹して、吾が妻とともに死ぬように」と命じるのが常で、この際も同じように命じて出陣した。大坂城に居た西

軍の石田三成は、関ヶ原の決戦に先立ち、大坂に残っていた各武将の家族を人質にしようと、先ず大坂玉造の細川屋敷にいたガラシヤを人質に取ろうとした。

三成は忠興がガラシヤに首つたけなくことを知っており、忠興は秀吉恩顧の大名なので事は簡単に運ぶであろうと軽く考えていたが、ガラシヤは頑としてそれを拒絶した。止むを得ないので翌日、石田方は実力行使に出て、兵に屋敷を囲ませた。

細川家の家臣が奥に居たガラシヤにその旨を伝えると、ガラシヤは屋敷内の侍女・婦人を全員集め「吾が夫が命じている通り自分だけが死ぬ」と言つて、彼女達を外へ逃がした。その後、キリスト教が自殺を禁じているため、また自分の死に様を他人に見られたくないとして、家老の小笠原秀清が襖の陰からガラシヤを槍で突き刺して殺し、ガラシヤの遺体が残らぬように屋敷に爆薬を仕掛け爆破し、小笠原もその中で自刃して果てた。

『細川家記』は、細川ガラシヤがその際に詠んだ辞世を「散りぬべき時知りてこそ世の中の花も花なれ人も人なれ」と記している。ガラシヤ

の教養と志の高さが偲ばれる。石田方はガラシヤの死の壮絶さに驚愕し、諸大名の妻子を人質に取る作戦を中止せざるを得なかった。関ヶ原後の論功行賞において、細川忠興は丹後宮津18万石から豊前小倉40万石に加増になり、最終的には忠利の代に肥後54万石の太守になったが、「半分はガラシヤの功」と言われている。

もともと、豊臣恩顧の大名も功があれば、加藤清正が肥後半国19万石から肥後一國51万石、福島正則が清州20万石から安芸50万石、黒田長政が中津18万石から福岡52万石、山内一豊が掛川7万石から土佐22万石等、それぞれ加増されており、細川家が特別扱いという訳ではない。

しかし細川家の特異さは、その後改易になった加藤清正に代わり、肥後一國54万石に更に加増されたことである。嫡男の忠利は徳川家の人質となつたが、秀忠や夫人のお江の方は「たま」の壮絶な死を気の毒に思い、病弱であつた忠利がよく懐いたため可愛がった。特に家光の乳母の春日局は明智光秀の重臣であつた斉藤利三の娘で、幕閣に隠然たる影響力を持つており、それとなく「たま」

の嫡男に気を配っていた。いずれにしても、細川54万石の影には「たま」の存在が大きく影響していることが解る。細川ガラシヤの墓は、肥後龍田山（熊本市）中腹の泰勝寺にある。諡は「秀林院殿華屋宗玉大姉」である。

力を持つており、それとなく「たま」